
宿直さんは高校生？

新米君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宿直さんは高校生？

【Nコード】

N5101D

【作者名】

新米君

【あらすじ】

ひよんな事で、超お金持ち高校の宿直になれた高校生帝楓ミカドカエデをとりまく恋愛もの。

く幕上げく（前書き）

へタクソだとは思いますが是非読んでください！！

〈幕上げ〉

〈第一幕〉

舞台は京都。

そして今日は大晦日。普通の家庭ならば、家で家族そろってテレビでも見ながら年を越そうとしてるはず……だがこの主人公は違う。

「ハア……どうしよう。このままじゃまた去年と同じく、橋の下での年越しになるよ……」

少し茶色のかかった髪を後ろで縛り、へその辺りまで伸ばしたこの女みたいな主人公の名前は、帝^{ミカド} 楓^{カエデ}性別は男。16歳。職業はバイト色々。

それというのも、この帝 楓は中学2年の時に親が二人とも海外に仕事を捜しに行ってしまうという、大変珍しい災難に見舞われた。しかも、その際置いていった生活費がたった10万円だけだった。これでは学費も払え無いという事で、中学を中退してバイト漬けの毎日を送っているという訳である。

「やっぱり、尋ねていける所なんて無いよな……しょうがない、諦めて橋の下に行くか！……うん。去年だって2〜3日風邪をひいただけで済んだしな。なんとかなるでしょ。」

こうして結局、橋の下に行くことにした帝だった。

こう愚痴りつつ、学校にトボトボ歩いていく夏江であった。

そのころ帝は・・・

「・・・・・・・・ハア、いくら言っても仕方ない。どこか別の場所を探すか・・・・・・・・」

こうして帝は歩き出す。

ふと、どこかの家の前で立ち止まる。

家の中からは、楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

「・・・・僕にもこんな時があったな・・・・ま、今となっては遠い過去の事だけど。」

そんな事を思いながらも帝は、歩き続けた。

そしてだんだんと、中心街から離れていく・・・

（第三幕）

（第三幕）

帝は歩いた。もう自分が何処にいるかも分からないまま、ただ歩いた。

それから数十分歩いたろうか、ふと立ち止まって辺りをみる。

目の前には大きな建物が・・・

それは前回紹介した、聖園高校だった。

「ここは確か・・・聖園高校だっけ？やっぱ有名なお金持ち高校だけあってデカイな・・・ん？」

帝が見た先には、開いたままの職員専用門が・・・。

「・・・これはそうなのか？神様がくれたチャンスなのか？！寒い外で寝なければならぬ俺への、チャンスなのか？！・・・でもやっぱ無断で入るのはな・・・いやいや、今はそんな事言ってもらえないじゃないか！！・・・けど人がいるかもしれないしな・・・」

〜

帝が心の中で、こんなやりとりをしていると向こうから、コンビニ帰りの夏江が来た。

「ブツブツ・・・ん？誰か学校の前に立っているわね・・・って門が開いてるじゃない？！まさか・・・」

夏江の脳内で勝手な妄想が・・・

「あれはきつと・・・侵入者！この人の少ない大晦日を狙って学校に侵入しようと・・・。てことは・・・侵入者確保！！名誉な事！

！！ごほうび！！お金！！！！！！」

夏江は勝手な妄想を膨らませつつ、帝の方へ走っていく。
そんな危険が迫っているとも知らず、まだ悩んでいる帝。

「うーん・・・どうしようかな・・・」

と、その時。

「こらー！！その不法侵入者！待ちなさい！！」

帝は思わずビクッと反応する。

「うわ！！ビククリしたく・・え？ぼくですか？」

叫ぶ帝。

「そうよ、あなたしかいないじゃない！！」

そう言われ辺りを見回す帝。

「本当だ・・・ってか僕まだ入ってませんよ？」

「問答無用！！」

だんだんと夏江が近づく・・・

「んく・・・なんだか捕まるとヤバそうだよなく・・・とりあえず、

逃げよう！」

逃げようと帝が後ろを向いた瞬間！！

ドカツ！！！！！！

夏江の飛び蹴りが入った。

ゆっくりと倒れる、帝・・・

（第四幕）

（第四幕）

「ふ．．．これでも私は空手5段なんだから。そう簡単には起きれないわ．．．さ、じゃあ学校に連れて行こうかし．．．ら？」

夏江は帝の方を見て、口が開いたままになった。なんと帝がのっそりと立ち上がり始めたのだ。

「いたた．．．ひどいな。僕まだ入って無かったのに．．．」

「そんな．．．私の蹴りが効かなかったの?!」

今の状況がまだ信じられない夏江。

「いえ効きましたよ．．．ただ僕は少し鍛えてるんでね。．．．でもやっぱり、痛いものは痛かったですよ。」

そう言い頭をさする帝。

それを見て夏江はため息をつく。

「そう．．．上には上がいるのね．．．負けたわ。．．．行きなさい! あなたの勝ちよ．．．」

帝はその言葉を聞いて、悟ったような顔になった。

「．．．確かに、このままやっても無駄のようですね。では．．．行かせてもらいます。」

そう言って、夏江に背を向け歩いていく帝。

が! 夏江は甘くなかった．．．

「フ．．．隙ありいいー!!!」

ガスッ!!

「う?!」

夏江は帝の背中にパンチをいれた。

「．．．こ、これは．．．う．．．動けない?!」

帝はその場に崩れ落ちる。

「……今、殴ったのは衝撃が加わるとしばらく全身が痺れ、動けなくなるツボ……。敵に背を向けるとそうなるのよ!」

「く……不覚です。」

ぐったりとする帝の服の襟を掴む夏江。

「さ!じゃあ行きましょうか、ボーナスさん!」

「は?ボーナス?何の事で……うわあああゝ!!!」

夏江は帝をズルズル引きずり、学校へ入っていった。

〈第五幕〉

〈第五幕〉

学校の敷地に入った帝は驚きを隠せなかった。

その驚きの理由は、まずバカデカイ校舎が目飛び込んできたから。そして次に、校舎まで100mくらいあるのだがその道と校舎を囲むように木がおいしげっていて、まるで森の中の様だったからである。

「……すごい……」

知らず知らず、呟く帝。

「でしょ？ 何たって有名な聖園高校なんだから！ そして、この学校の教師の一人が私なのよ！」

誇らしげに胸を張る夏江。

「え？ 先生だったんですか？ てっきり宿直さんだと思ってましたよ。」

「失礼ねー！ ……ま、今は宿直を代わりにしてるんだけどね。」
こんなやり取りをしていると、夏江が急に止まった。

「さ、着いたわよ。ここが宿直小屋。」

そう言われ帝はふらつきながらも、立ち上がり後ろをしてみる。

そしてまた、帝は言葉を無くした。

その宿直小屋というのは、3LDKは余裕であろうという一軒家だった。

「……あのこれ本当に宿直小屋ですか？」

「そうよ。この学校では宿直を雇っているの。だからこの位の家なの。」

「ほえ……」

まだ、しっくり来ない帝。

「フッフッフっ・・・驚きっぱなしのようね？まあいきなりこんなスゴイとこにきたんだもんね。無理もないわ・・・っていうか寒いから中入るわよ！早く来なさい。」

「あ・・・はい。」

袖を引っ張られながら歩く帝。

中に入り、リビングを見ると予想通り綺麗にかたずけてあった。

「さ・・・じゃあとりあえず、座って。」

そう言い、帝を椅子に座らせる。

「では、聞こうかしら？」

夏江も向かい側に座る。

「あの・・・何をですか？」

「とぼけない！！見たんだから！あなたが空いている門から、学校に入ろうとしたのを。」

興奮する夏江。

「ん・・・これは一から説明した方がいいな」

そんな事を思い一度、深く深呼吸する帝。

「・・・では、最初から説明するので聞いてください。」

真剣な顔の帝。

それで、少し心動かされた夏江。

「まあ、・・・言い訳くらいきてあげるわ。」

そう言って帝を見る。

「ありがとうございます。では・・・」

そう言って帝は話始める。

（第六幕）

（第六幕）

そして、帝は今までの人生の事・今どういう状況なのかを夏江に話した。

「……………って言う訳なんですよ。」

夏江はしばらく黙っていた。

「……………何だかすごいわね……。可愛いそうとしか言ってあげられないわ……………。でも、帝君が怪しい人じゃないって事は分かったわ。」

「分かってもらえましたか。……安心しました。」
胸を撫で下ろす帝。

「では、誤解も解けたので僕はこれで……」
そう言い、席を立つ帝。

「ちよっと待って!!！」

夏江は帝を呼び止める。

「……………何でしょうか？」

「これで……………って、何処に行く気なの？行く所なんて無いんですよ？」

「はい……………でも、あなたに迷惑を掛ける訳にはいきませんから。」

「だからって……………」

ふと、夏江の脳裏に過去の思い出が蘇る。

「『そうよ……………あの時、決めたじゃない。私と同じような人を見つけたら、全力で助けようって!!……………でもどうすれば……………』」

帝は廊下への戸を開けだしている。

「……………そうだ!!！」

「ちよっと待って、帝君!!！」

こちらを振り返る帝。

「あの・・・ですから、お気持ちだけで十分・・・」

「帝君！あなた、この学校の宿直になりなさい！」

「・・・へ？」

突然の事に訳の分からない帝。

「あの、今何て・・・」

「だから、この学校で宿直として働きなさいって言ったのよ。」

「そんな、輪江 z s x r c t y v b g j v k b ん・・・」

訳の分からない事を言う帝。

「・・・落ち着いて、日本語で喋ってくれない？」

そう言われ、深呼吸をする帝。

「・・・すいません。いきなりで・・・。あ、で今言った事は・・・」

「もちろん本当よ！」

その迷いの無い返事に戸惑う帝だった。

〈第七幕〉

〈第七幕〉

「あの・・・それは、僕なんかでよろしいのですか？」

「どういう事？」

「だって僕は、中学を中退してるんですよ？そんな僕に・・・」
うつむく帝。

「ん・・・確かにね。・・・でも私に任せて！明日、校長先生が来ることになってるからその時お願いするわ。だから心配しないで。」

帝はしばらくだまっていた。

そして帝の目から、一粒の涙が落ちた。

「どしたの?! 私何か嫌な事した？」

「あ、いえ・・・違うんです。ただ・・・とても嬉しくて・・・。こんな僕に、これだけ優しくしてもらって・・・本当にありがとうございます！」

帝は深くおじぎする。

「そんな、帝君・・・顔上げて。」
帝の顔を上げさせる。

「もう十分、分かったから。だからしっかりと、気持ちを入れ替えて。ね？」

「はい。・・・がんばります！」
そう言って、敬礼をする帝。

「うん！ よろしい。」
夏江は上出来という顔をしている。

「あの、ところで・・・」
真剣な顔の帝。

「ん？・・・何？」
緊張する夏江。

少し言うのをためらったが、意を決して帝は言った。
「今更ですけど・・・あなたのお名前は？」

ズコッ！！

ずっこける夏江。

「・・・イテテ。もう、帝君神妙な顔するから緊張したじゃない！」

「すいません・・・今更聞くの恥ずかしかったんで。」
すこし照れたように頭をかく帝。

「しょうがないわね・・・。私の名前は梶木 夏江。いい？ 覚えたわね？」

「はい、夏江さん！」

笑顔の帝であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5101d/>

宿直さんは高校生？

2010年11月3日02時31分発行